

漢方医学

漢方医学は、古代から近世までの間に、中国大陸から断続的に伝来した中医学を独自に体系化した、日本固有の医学です。江戸時代、オランダから伝わった医学を「蘭方」と呼んだのに対して、中国から伝わった医学を「漢方医学」と呼ぶようになりました。



概要

漢方医学

漢方医学における伝統的な診断は、五官（眼・耳・鼻・舌・身）によって症状を把握し、症候群を決定する『証（しょう）』という方法によってなされ、それにより生薬の選別と調合を行います。証を決定するための診察は、全身の状態を観察する「望診（ぼうしん）」、患者に質問する「問診（もんしん）」、

患者の呼吸や咳を聞く「聞診（ぶんしん）」、脈や腹部を触診する「切診（せつしん）」の4つに分けられます。

また、漢方医学には「気・血・水」が生命活動の基本であるという概念があり、この3つのバランスにより、健康を保つことができると考えます。

起源

漢方医学

日本でも、古来より経験的医術や呪術的医術が実践されていたと言われていますが、その間、中医学が朝鮮半島経由で断続的に日本に伝わっていました。6世紀から7世紀頃には、遣隋使や遣唐使などにより直接中国の医療が日本に入るようになり、仏教の伝来と共に医療を司るようになった僧侶は僧医と呼ばれ、近世まで医療の担い手として広く活躍していました。

その後、江戸時代の後半には、中医学を改良し、日本独自の『漢方医学』を目指す人々が現れました。

また鎖国（1639 - 1853年）により一部の薬草類の入手が困難になり、中国との学問的な交流が激減したこともあり、日本の漢方医学は中医学とは少し違った方向に発展していったのです。

明治時代には、西洋医学のみを正規の医学とする医師免許制度が施行され、漢方医学は一時衰退の道を辿りましたが、近年、その力が再び注目され、大学病院などでも取り入れられるようになりました。

治療

漢方医学

漢方医学の治療法には、按摩、指圧、漢方薬、鍼灸、食養生などがあります。

按摩（あんま）

按摩とは、なでる、押す、揉む、叩くなどの手技を使ったマッサージ療法です。痛いところに思わず手を当てたり、撫でたりする行為は按摩的であるが、『按摩』という言葉は中国から輸入され、奈良時代の文献に記述されていた。

指圧

按摩やカイロプラクティックなど多数の手技療法を融合し、大正時代に現在の指圧療法の原形が確立された。指と手掌のみを使い、体表のコリの位置や状態からその症状を見極め、そのまま治療につながるのが特色で、日本の独特の手技療法として世界中に普及している。